

二〇二一年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は から 、2 ページから 19 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、**字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。**)

今、日本では、「社会に出れば個人の能力が問われる」「個性を持たなきゃいけない」「組織に頼らず個の自立をめざせ」などと、さかんに言われています。

この本のキーワードである自分力は、「自立」「個性」「能力」などを総合したのですが、誰かから「持たなきゃいけない」と強制されるようなものではありません。自分力とは、その名の通り、①自分で身につけ、自分で高めていくものです。

ただ、今までバスしか乗ったことのない人に、いきなりF1レースのドライバーになれといつても無理なように、自分力は大人になって急に身につくものではありません。

みなさんくらいの年齢から、意識して自分力を高めていくのが一番確実な方法です。

(中略)

「世界にはパワフルな天才や秀才がごろごろしているから、物理や数学のように何か一つの専門領域でトップになるのは無理だろう。でも、専門領域と専門領域が接する境界領域なら、世界的に見ても人材が手薄だから勝負できるかもしれない。境界領域を自分の専門にしてしまえば、その第一人者になれるはずだ」

若い頃の私はこう思い立ち、自分の専門分野として自信と誇りを持って世界を見つけるための旅をはじめました。その過程で、学歴や職歴に寄りかかっているのはダメだということを思い知らされ、やがてバツル研究所の研究者となってテクノ・エコノミクスという分野に到達したわけです。

このバツル研究所は欧米ではとても有名なのですが、日本では知っている人のほうが少数派です。私が在籍していた頃は、日本ではほぼ「無名」といっていいほどでした。研究員だった私が日本に出張し、ある企業の人に自己紹介をしたら、「ばつてら寿

司しとどういう関係のビジネスですか」と、お寿司すしのセールスマンだと思われるでしまつたくらいです。

そのあと入ったエア・リキッドも、ヨーロッパではそれこそエクセレント・カンパニーとして知名度がありますが、アメリカに赴任ふにんした時、子会社（社名・リキッド・エア）の名前を名乗ったとたん、「航空会社に用はない」と言われたり、日本では、ヘア*6リキッドの会社と間違まちがわれたりしました。

（中略）

職場を変わるたびにいつもこのように、ブランド的に無名なことによるハンディを負わされるので、②私は、いつしか、「これは偶然ぐぜんではないな」と感じるようになりました。自分は仕事で他の人がやらないことをやろうとしている。だから会社のブランドに乗っかって勝負してはいけない。あくまでも、今北純一いまきたじゆんいちという「個人」の力で勝負すべきなのだ、という、これはまさしく天の配はい剤ざいなのではないかと思っています。

とはいえ、ブランドなしで日本で勝負するのは大変です。なぜなら日本人の多くは、「個人」の力量をしっかりと見ようとはしないからです。ブランドがあれば、日本ではあたかもそれが信用証明であるかのごとくに扱あつかわれて、これまでの仕事の実績などについて細々こまこまと何も訊きかれません。

一方、ヨーロッパやアメリカでは、ビジネスも日常生活も、個人対個人の勝負です。特にヨーロッパでは、名刺めいしの肩書かたがきなど何の役にも立たない。そのかわり、自分が訴うたえたいことを信念をもって相手に思いきりぶつければ、その思いが通じる可能性が開けてくる。

表面的な装飾そうしやくで人の中身を判断しがちになってきている日本と、個人の資質という中身で勝負のヨーロッパ。後者の世界で実力を試してみたい、そんな誘惑ゆうわくに駆かられませんか？

自分力を身につけ、高めよう——。こう言うと、何かとても大変なことをやらなければならないように感じるかもしれませんが、あまり難しく考える必要はありません。

まずは身近なことから見直していきましょう。たとえば、③携帯のメールのやりとりです。

日本に来ると、電車の中はいうにおよばず、道を歩いている時でさえ携帯メールのやりとりをしている人を見かけます。こういうシーンを、私はできるだけ見たくない。なぜなら、携帯メールを四六時中やっている人の姿が、携帯電話に振り回されて他のことを何も考えられなくなっている「機械の奴隷」に見えてしまうからです。

携帯電話は確かに便利な道具です。ITが便利なのはいいけれど、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションの重要性が、どんどん忘れられているような気がします。

ここで一つ、みなさんに質問をします。

「携帯メールのやりとりって、Aゼツタイに必要なの？」

もしもあなたの答えが「イエス」だとしたら、それは「④」あるいは淋しさの現れかもしれません。本当に緊急の用事があるわけではなく、「仲間とつながっている」という感覚をキープしたいために、携帯メールのやりとりをしているわけではありませんか？

自分を高めようと思うなら、まずそこから見直すべきだと思います。

もちろん私は、友達とのつながりを否定しているわけではありません。携帯電話を持つとか、メールをすべてやめる、などと言っているわけではありません。緊急連絡が必要ということだっただけです。

ただ、「自分一人きりになる」ということの重要性を知ってほしいのです。

携帯メールに振り回され、他のことを考える余力もなくなつて、「メールが来ないと淋しい」「携帯がなかったら生きていけない」「メールが来ないのはみんなに嫌われているからだ」といった強迫観念に追い込まれてはいませんか？

もし思い当たる点があるなら、しばらくの間、携帯電話なしで生活してみたらどうでしょう。⑤嘘も方便で「壊れちゃった」ということにして、何日間か、携帯メールから自分をBカイホウしてみるのです。

そうすれば、自分一人だけの時空間を持ち、思索しそくすることの大切さがわかると思えます。

読書が好きなのもいるでしょう。日記を書くことに意味を見出しみだしている人もいますでしょう。あるいは公園のベンチに腰掛こしかけて考
えることがリフレッシュにつながるという人もいますでしょう。それぞれにあった趣味しゅみというものは、人間にとって大事なことです。
しかし、どれも、誰だれかにメールを打ちながらやるものではありません。

朝の洗面の時だつてそうです。一人きりでしょう？ 鏡の中の自分の顔を見て、「昨日、友達と喧嘩けんかした。今日は普通ふつうに話せるか
な」とか、「宿題しゅどめやってない。当てられたらどうしよう」などといろんなことを思いながら、自分自身と会話をしているわけです。
その時に携帯けいたいメールが気になるようなら、かなり問題です。

一人きりで自分と向き合う時空間には、友達と話したりメールしたりしている時とはまったく違ちがう、独特の感覚があるはずで
学校の成績や友達関係以外のことで、自分の興味はどんなことに向いているのか。あるいは、どんなことに自信をなくしている
のか。成績に自信がないのか、生き方に張りがいいのか、家族との毎日のやりとりがぎくしゃくしているのか、人とのコミュニケ
ーションがうつつとうしくなっているのか。そういうことをじっくり考えられるのも、一人で自分と向き合っている時です。

そういう時空間を、どうか大切にしてみてください。
オックスフォード時代*8に「名誉めいよある失業」の危機に見舞みまわれた頃ころ、私が住んでいた教官用の共同住宅には、グレースという中年
の女性*9が、週末そうれいごとに掃除そうじに来ていました。

⑥ グレースおばさんは、いつも楽しそうに鼻歌を歌いながら窓を拭ふいていました。きっと、家族や友人めくに恵めぐまれていたのでは
う。そうでなければ、こんなはつらつとした表情はできないと感じるほど、彼女かのじょは輝かがやいていました。

その姿を横目で見ながら、次の仕事が見つからない私は、「いつも楽しそうでいいな。この人のほうが僕ぼくよりはるかに幸せだ」と、
うらやましさを感じたものです。

どうしてグレースの方が僕ぼくより幸せなのだろう。何が違ちがうのだろう——。一人でずっと考えたすえに得た答えは、「人生で大切な

のは、学歴でも、社会的ステイタスでも、お金でもない。『自分の宇宙』を持っている人が幸せなんだ」という、ごく当たり前のことでした。

当時の私は、まだ自分力というものを何も確立していませんでした。そんな状態で次の仕事を見つけようともがいていたのだから、毎日がつらくて当然でした。

その点、グレースにはしつかりとした自分力があり、自分の仕事に対する誇りもあつた。だから、いつも楽しげに掃除をしているのだと思います。幸せな人達はみんな、そういう雰囲気を持っていて、隠そうとしても隠せないのです。

「有名校や有名企業のブランドなんて、幻みたいなものだ。本当は自分以外に何も無い。僕が今の自分の存在意義をちゃんと自覚できれば、毎日楽しみを見出すことができる。こうした小さな発見を積み重ねていけば、今までの後ろ向きサイクルは前向きサイクルに変わるはずだ」

私は、このことによく気付きました。そして、これが私の出発点となりました。

今思えば、私がグレースに感じたうらやましさは、いつまでたっても自分力を確立できないことへの、コンプレックスの裏返しだったかもしれません。

⑦ 憧れや羨望はコンプレックスと表裏一体なので、「あの人の人生と私の人生を取り替えたい」といった感情におちいるのは、とても危険です。なぜなら、その憧れが実現不可能な幻想だと気づいた時、奈落の底に突き落とされたようなものすごい「⑧」を味わい、取り返しのつかない結果になってしまうこともあるからです。

「うちは金持ちじゃないし、自分は学校でトップの成績でもない。でも、誰かの人生と取り替えたいなんて思わない」
このような感覚を持っている人こそ、実は打たれ強く、また「自分の宇宙」を形作る潜在能力に恵まれているのです。

(『自分力を高める』 今北 純一)

〔注〕 *1 F1レース＝高性能のレーシングカーによるスピードを競うレース。

*2 バッセル研究所＝アメリカの理工学系研究所。

*3 テクノ・エコノミクス＝科学技術と経済の両方の面を結びつけて研究する学問。

*4 エア・リキード＝フランスにある産業ガス・医療ガス（いりょう）の世界大手のメーカー。

*5 エクセレント・カンパニー＝超優良企業（ちやうゆうりやう きせいよう）。

*6 ヘアキッド＝男性用整髪料（せいはつ）。

*7 フェース・トウ・フェース＝直接会うこと。

*8 オックスフォード＝イギリスにある総合大学。筆者はここに勤務していたことがある。

*9 コンプレックス＝劣等感（れつとうかん）。

*10 奈落（ならく）の底＝地獄（じごく）の底。抜け出すことのできない、どうにもならない状態。

問一 ―線①「自分で身につけ、自分で高めていくもの」とありますが、自分力について説明した次の文の空らん（A）・（B）に本文中からAは十五字、Bは九字で探し、抜き出しなさい。

筆者は自分自身の経験から、自分力とは、（ A 十五字 ）に身を置き（ B 九字 ）に気づくことで身につけていくものだと考えている。

問二 ―線②「私は、いつしか、くなりました」とありますが、筆者はどのようなことを感じたというのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大切なのはこれまでの自分ではなく、未来の自分がどうなのかだと感じた。

イ 自分が学歴やブランドを鼻にかけていることを相手に見透かされているのだと感じた。

ウ 自分は運命的に今自分が力をつけなければならないことを知る経験をしているのだと感じた。

エ 自分が体験していることは、今後の自分の成長にプラスになることだと感じた。

オ 自分はこの会社で力を発揮してこそ成功することが可能であるのだと感じた。

問三 ―線③「携帯メールのやりとり」について、筆者はどのような点を否定的に見ているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絶えず人とつながっていることや周囲との関係に気を取られ、自分一人になって自分を見つめることができなくなること。

イ 相手に気に入られるために本心とは違うことを述べてしまい、自分の本当の気持ちと向き合うことができなくなること。

ウ 機械に支配され携帯の画面ばかりに目がいくようになり、自立した一人の人間という感覚がなくなってしまうこと。

エ 自分がすべきことよりも相手への返信を送ることを優先してしまい、結果的に仕事が後手後手に回ってしまうこと。

オ メールによって毎日の自分のスケジュールが管理され、人生の主体が自分からメールに取って代わられてしまうこと。

問四 空らん「④」「①」⑧「①」に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ④ 孤立感 ⑧ 恐怖感

イ ④ 劣等感 ⑧ 喪失感

ウ ④ 罪悪感 ⑧ 虚無感

エ ④ 疎外感 ⑧ 焦燥感

オ ④ 孤独感 ⑧ 挫折感

問五 — 線⑤ 「嘘も方便」の意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 嘘も使い方によって、人を幸福にすることもあれば不幸にすることもある。

イ 嘘は持っている情報量の最も多い人がうまくつくことができるものである。

ウ 事をうまく運ぶためには、一つの手段として時には嘘が必要なこともある。

エ 嘘をつき続けているといつの間にか嘘が嘘でなくなってしまうこともある。

オ 嘘であっても、相手のことを心から思いやったものであるならば許される。

問六 — 線⑥ 「グレースおばさんはく拭いていました」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 揺るぎない「自分の宇宙」を持っていることで、自分が抱いているコンプレックスを隠しているから。

イ 自分の仕事は決して誰にも負けることはないという、自己への誇りに満ちあふれているから。

ウ 窓拭きをすることで多くの人に感謝され、心から幸せな気持ちを味わうことができるから。

エ 誰かと比較することなく、自己との会話を通して得られた確固たる自分を持っているから。

オ 自分を認めてくれる家族の存在のおかげで、誰にも負けない自己肯定感を持っているから。

問七 ー線⑦「憧れや羨望はコンプレックスと表裏一体」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手へのあこがれは自分の持つていないものを相手が持つていることに対して抱くものであり、それはそのまま自分が相手より劣っているという自覚につながっているということ。

イ 相手へのあこがれは相手の人生と自分の人生を重ね合わせて見ることから出発しており、その結果として自分の人生よりも相手の人生の方が輝いて見えてしまうということ。

ウ 自分のあこがれに向かつて上を目指そうと思っても、自分への自信がなければ目標には到達することができず、最終的には自分への失望という結果にいたってしまうということ。

エ 相手と自分を比べて相手にあこがれを抱くのと同じように、相手も自分にあこがれを抱くものであり、そのことがきっかけとなって両者とも自分自身の至らなさに気づくということ。

オ 自分に自信が持つていないために、相手が自分にあこがれを抱いてくれているとしてもそのことが自分への負い目となって、次第に自分で自分を否定しないではいられなくなってしまふということ。

問八 日本とヨーロッパやアメリカのビジネスに対するそれぞれの姿勢を四十五字以内で説明しなさい。

問九 ー線A「ゼツタイ」・B「カイホウ」を正しい漢字に直しなさい。(一画一画でいねいにはつきりと書くこと。)

二 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

照美の住む町の丘のふもとには、かつてレイチエル、レベッカという姉妹がいる英国人のバーンズ一家の別荘だった、古い屋敷がある。子どもたちのあいだでは不思議な洋館として有名なその屋敷の庭には池があり、照美も幼い頃は弟の純と一緒に忍び込んで池の周りで遊んでいたが、純を亡くしてからは足が遠のいていた。その後、照美はクラスメイトのおじいちゃんから、彼が幼いころに、まだバーンズ一家が滞在していたその屋敷へ遊びに行ったときの思い出話をよく聞いていた。ある日、照美はそのおじいちゃんが倒れて病院に運ばれたこと、そしてバーンズ屋敷が取り壊されることに決まったということ聞かされる。

次の日の朝、ママは照美が少し元気がないことに気づいた。

——夕べの食事ほとんど手つかずだった……。

ママは一瞬上から下まで照美を鋭く見つめた。いつにもまして口数が少ない。ちよつと気になったが、今日はいかにくずっと忙しい。学校に行ってくれたほうが安心なので、そのまま送り出した。

照美の足は、学校へは向かなかった。おじいちゃんの部屋の前で照美はしばらくぼんやりしていた。

この庭の前で、おじいちゃんが倒れる二、三日前に照美は久しぶりでおじいちゃんと話をした。おじいちゃんは庭を見ながら、昔自然農法の仕事をしたかったことを話してくれた。

①おじいちゃんの若かった頃の、理想に燃える生き方をききながら、照美は自分の両親のことを思わずにいらなかった。パパとママは真面目に生きてるけど、誇りをもって生きてない。楽しんでもない。光に向かうまっすぐさがない。それは子どもにとってはどうにもならないやりきれなさだ。

「レストランやるんだったら、もつとこだわればいいのに。無農薬の野菜しか使わないとか、環境問題とか。自分のこだわりってもんがないんだ。生活するだけなんだ」

照美はそのとき、珍しく激しくそう言い切ると、②少し涙が出てきた。

「照ちゃんはそういうがな」

と、おじいちゃんが照美をたしなめたとき、照美は当然のように、(この場合たいいていの大人がこのパターンで反応するものだが)誰のためにパパやママが必死で働いているのか、と叱責されるものと予想していた。だが、おじいちゃんはおつとりと、

「真剣につくられた無農薬野菜は、商業ベースにのるほどの安定した収穫量は期待できないんだよ。だから、そういうレストランは経営がとて難しい」

と真顔でいったので、③かくんと何かが外された気になった。

「たい肥をどんどんやって、栄養過多にすれば、なるほど野菜はよく育つ。しかし、畜糞を多く与えられた野菜は窒素分が多くなって、収穫後、あまりのアクの多さを自分で持て余してすぐにしなびてしまう。そういう野菜は緑色が異様に濃くて、食べるとポクポクする。窒素分が多いせいだ。やがて、亜しょう酸となつて、害になる。アクをとればまだいいんだが……。だが、このアクの部分に発ガンを抑制する成分があるという説もあるから、まあ、何事もほどほどつてことかな。畜糞を使わない、雑草のようにさわやかな、生命力にあふれた野菜をつくるのが、おじいちゃんの夢だった。ある程度はそれもできたが、それで生活することはとても難しかった……」

おじいちゃんのいっていることは、照美にはよくわからないこともあったが、④それでもなんだか心地よかつた。おじいちゃんは死んでしまうのだろうか。

もう二度と会えなくなるのだろうか。

——純のように？

照美はもう、自分を消してしまいたいようなやりきれない気持ちになっていた。そのまま真っすぐにバーンズ屋敷へ向い、昨日動かした門をくぐった。⑤池の方は見ないようにしてドアの前に立った。

照美はもともと、それほど冒険心に富んでいる子でもなければ、好奇心にあふれているわけでもなく、勇氣に満ちているというタイプでもなかった。けれど今はたった一人で、おぼけ屋敷ともささやかれている人氣のない屋敷の中へ入ろうとしている。

昔はともいじめかめしく恐ろしいものに見えたドアが、今はおじいちゃんからしよっちゆうきいていたせいで、なんとなく懐かしいもののように感じられた。おじいちゃんも、このドアを通して、レイチェルやレベッカのところへ遊びに行ったのだ。

そのとき照美の心に、何故だか、ドアがすつと開くという、確信のようなものが突然閃いて、⑥ドアの取っ手に手をかけた。門のときと同様、ドアはいくらかきしんだ音をたてたが、すぐに動く意志を見せ、向こう側に向かつて開いた。

中は真っ暗だった。けれど、入ってしまうと眼が慣れてきて、窓からの外光だけで、何とか中の様子がつかめた。

年代物のほこりつぼさと、鎮まっていた空気の粒子が一斉にこちらを振り向いたような気配があった。歩くと、ぎーぎーと、床がきしんだ音をたてた。

その音が人氣のないホールにこだまして、何かがこぞってこちらに注目している感じがした。誰もいないはずなのに、何かがつしり詰まっている、濃密な気配を感じる。

照美は、自分の一挙手一投足が、息を凝らしている何かに見つめられているような気がした。

——おじいちゃんも、ここへ来たんだ……。

照美は子どもの頃のおじいちゃんが、まだそのあたりを歩いてでもいるかのように、無意識に目で探そうとしていた。

そのとき、屋敷の奥からふつと、女の子の影が動いているのを見たように思った。どきんとして、目をこらすと誰もいない。気のせいだったのか、とほつとすると、その奥の方で不思議な存在感を放っている、大鏡を見つけた。

その瞬間、この屋敷の中の不思議な気配は、⑦この大鏡の辺りを頂点としていることがわかった。

—あれが、おじいちゃんの言ってた鏡に違いない……。

鏡に近づくと、それがまるで遊園地のマジックミラーのように、歪んだ形に映った。もう何年も人を映していないので、まるでちゃんとした映し方を忘れてしまったとでもいうようだった。

周りの木枠には、凝ったレリーフが施されている。一重の花をあちこちにつけた蔓薔薇と竜が見え隠れしながら鏡の周りを巡っていた。その、一枚一枚の鱗や花びらの微妙な凹凸まできちんと彫ってある精巧さに見とれ、照美は思わず手でぐるりと鏡の周りを触って確かめてみた。

その途端、何かのうなり声とも、遠いどこから響くこだまとも聞こえる声が照美の耳に響いた。

「フーアーユー？」

それが英語の、あなたはだれ？ という意味の言葉に聞こえたのは、昨日英会話教室をさぼったからかしら、と、一瞬照美は思い、反射的に大声で、

「テ・ル・ミイ」

と応じた。

鏡の向こうで、一瞬静まる気配があり、それからまたあのこだまのような声が響いた。

「アイル・テル・ユウ」

そして、鏡の表面に霧のようなものが急に集まったかと思うと、それはふわーっと外まで湧き出してあつというまに照美を包み込んでしまった。

—えっと、それって、話してあげようとか、教えてあげようっていうこと？……

照美は⑧思いがけない展開に戸惑いながらも、英会話教室の生徒らしく、一生懸命その奇妙な声の意味を判読しようとした。

最近、英会話教室でLとRの発音を繰り返して練習させられていたので、日本語のてるみ、という名前までこんがらかって英語つ

ぼく発音したのかもしれない。英語で言われるのと、日本語で言われるのでは、応^{こた}えるときに顎^{あご}の力の入れ具合^{ぐあ}いが微妙^{びみょう}に違^{ちが}うものだ。テル・ミイ、つまり、私に教えて、という意味にとられたのかもしれない。

霧^{きり}のようなものは盛んに前方から後方へ流れてくる。まるで通路でも作ろうとしているかのようだ。それにしても、この石灰の
ような、変な匂^{にお}いは何だろう。

そのとき、その霧^{きり}の前方を、おかつば頭を揺^ゆらして女の子が歩いて行くのが見えた。

——あれ、あの子さっきの……

照美^{てるみ}はその子に誘^{きそ}われるように、鏡の木杵^{きわく}を握^{にぎ}ったまま、一歩、二歩と⑨恐^{おそ}る恐^{おそ}る霧の中へ踏^ふみ出した。

(『裏庭』 梨木 香歩)

〔注〕 *1 マジックミラー || 対象が歪^{ゆが}んで映るように特別な加工がされた鏡。

*2 レリーフ || 浮^うき彫^ぼり。

問一 | 線①「おじいちゃんの若^{わか}かった頃^{ころ}の、理想に燃える生き方」とありますが、おじいちゃんの理想の具体的な説明をして
いる部分^{ぶく}を含む一文を探し、最初の五字を抜^ぬき出^だしなさい。

問二 —線②「少し涙が出てきた」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 両親への不満を思ったよりも激しい口調で言ってしまったため、おじいちゃんに怒られると思って怖くなったから。

イ 両親の生活が全く充実していないということをおじいちゃんに指摘されたのに、何も言い返せなくて悔しかったから。

ウ おじいちゃんの理想を聞いて、自分の両親にも誇りを持ってほしいと思うけれど、その方法が分からず絶望したから。

エ おじいちゃんの元氣だったころの姿を思い出し、入院したおじいちゃんのことを心配でたまらなくなってしまうたから。

オ おじいちゃんの話聞いて自分の両親の現状を考えると、やり場のない思いがわきおこり、もどかしさを感じたから。

問三 —線③「かくんと何かが外された気になった」とありますが、この時の照美の心情として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おじいちゃんも他の大人と同じように叱るのだと思って緊張したが、思ってもみなかったことをおだやかに言われたので、拍子抜けしている。

イ 両親を見下したことをおじいちゃんに怒られると思って身構えていたが、おじいちゃんは照美と同じ目線の高さで考えてくれたので、ほっとしている。

ウ 照美のために必死で働いている両親を激しい口調で批判したことについておじいちゃんに怒られるはずが、予想外に肯定されたために気が抜けている。

エ 理想をもたない両親への不満を一生懸命訴えたはずなのに、おじいちゃんが真剣に話したことは的外れでしかなかったため、張り合いを失っている。

オ 憤慨する照美に対して、おじいちゃんはまじめな態度で答えてくれたが、おじいちゃんの答えは照美にとって理解できないものだったため当惑している。

問四 —線④「それでもなんだか心地よかった」とありますが、この部分の照美の様子を説明したものととして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初めておじいちゃんが苦労話を聞かせてくれたことで、おじいちゃんが自分を信頼してくれたのだと誇らしく思う様子。

イ おじいちゃんが、なんとかして照美を慰めようとしてくれていることが分かって、その思いやりに感謝している様子。

ウ 両親と同じように、おじいちゃんも苦労したのだと知り、やはりおじいちゃんはすごい人だと改めて実感している様子。

エ おじいちゃんから、こだわりのある生活の苦労がとつとつと語られるうちに、やりきれなさがうすらいできていく様子。

オ おじいちゃんの話聞いて、やはり両親の生き方は間違っているのだと自分の意見が認められたように感じている様子。

問五 —線⑤「池の方は見ないようにして」とありますが、照美が池を見ない理由として考えられる最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辛い記憶が残る池を見ると、おじいちゃんも死んでしまうのだという実感がわき、恐怖と焦りに支配されてしまうから。

イ 池を見て弟を思い出すことによって、病院に運ばれたおじいちゃんの死が現実のものになってしまうと確信されたから。

ウ おじいちゃんが死んでしまうかもしれないという今の胸が詰まる状況が、池を見ると弟の死と重なってしまうから。

エ 倒れたおじいちゃんのことを思って池を見ると、この場所で弟と遊んだ思い出までもが嫌なものに思えてきてしまうから。

オ かつて弟と一緒に遊んだ池を見ると、弟がもう死んでしまったことが嫌でも思い出され、悲しくてしかたがないから。

問六 ―線⑥「ドアの取っ手に手をかけた」とありますが、この部分の照美の心情の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 以前は近寄りにくいものだった屋敷が、おじいちゃんの思い出話を聞かせてもらった今は、不思議と近い存在に感じ、屋敷の中に入ろうと思っている。

イ おじいちゃんと同じように私もこの屋敷に歓迎されていると実感し、今まで屋敷に抱いていた抵抗感が無くなり、屋敷に入ろうと意気込んでいる。

ウ ひとけのない古い屋敷はかつては恐怖の対象でしかなかったが、成長した今では、屋敷の中で何が起きても私は平気だという勇気が湧いている。

エ 庭に忍び込んで勝手に遊ぶのとは違って、幼い頃のおじいちゃんと同じように、私も屋敷の中で遊ぶことを許されているという自信を持っている。

オ 昔のおじいちゃんのように、私もレベッカやレイチェルと遊ぶために来たのだから、このドアを開けて中に入らなければならないと直感している。

問七 ―線⑦「この大鏡の辺りを頂点としていることがわかった」とありますが、これはどのようなことを意味していますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰もいない空間の中で、大鏡の辺りだけが異質であり、厳粛で近寄りがたい印象を抱いているということ。

イ 屋敷の持ち主が、確かに生活していたことを感じさせ、不思議な魅力に目が離せなくなっているということ。

ウ 空っぽな部屋の中で、大鏡の辺りだけ怪しい気配が特に強く、「何か」がいそうな予感がするということ。

エ ただでさえ不思議な空間の中で、特に異様な雰囲気をつけており、思わず引き寄せられてしまうということ。

オ 長い時間をかけて強まってきた不思議な魅力が、大鏡から発せられているように感じられるということ。

問八 ー線⑧「思いがけない展開に戸惑い」とありますが、「思いがけない展開」とはどのような展開ですか。照美の「戸惑い」の内容を明らかにしながら四十五字以内で説明しなさい。

問九 ー線⑨「恐る恐る霧の中へ踏み出した」とありますが、この時の照美の様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幼い頃のおじいちゃんに会うために、せいっぱいの勇気を出して過去の世界に入ろうとする様子。

イ 現実離れた状況に緊張してはいるものの、不思議な存在に引き付けられ、進んでいこうとする様子。

ウ 霧が逃げ道をふさぐように立ちこめ、恐怖におびえているが、もう後には引けないので覚悟して進む様子。

エ 屋敷に充滿している不思議な力に操られ、何も考えることなく足だけがこちなく動いている様子。

オ 鏡の中の女の子に照美自身のことを教えてあげるために、少し怖いが未知の世界へ挑もうとする様子。

